
デスゲーム

夜市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デスゲーム

【Nコード】

N5313G

【作者名】

夜市

【あらすじ】

突然きた自分宛の手紙。そのおかげで私の人生は狂わされる。大好きな家族と別れ、見知らぬ男と共に、「殺し合い」という名の死の遊びで生き延びなければならない。いったい私は、本当に生き延びることができるのだろうか……

stage:0 夢に見た者

燃え盛る炎。

道に転がる死体。

そして、破滅へ向かう破壊音。

どれもが、私を恐怖に陥れる。

「お前は先に逃げろ！！早く！！」

裂けた道の向こうで、男は私を逃がそうと叫んでいて、

「でも、あなたはどうするの！？」

でも私は、そんな彼を見捨てる事も出来ず、

「俺は…残る。」

「え！？そんなの駄目！！早く捕まって！！」

どうにか助けようと必死だった。

「……………」

「早くっ！！！！」

「じゃあな。また、あとで会おう。」

けれど、彼は私を不安にさせまいと笑いながらそう言った。

でも、気付いていた。

あなたが死ぬ気なんだってこと。

「本当…あなたって嘘が下手ね？」

私は泣きながら崩れ落ちた。

そこでいつも映像は終わる。

目の前が真っ暗になった。

stage : 1 いつもとは違う物

AM : 7 : 00

いつもの時刻に起床。

ベットを降り、手櫛で軽く乱れた髪を直す。

そして、台所に向かうと、手早く朝食を作る。

これも、母親のいない私にとってはいつも通りのこと。

「オイ、由美。」

「はあい。」

それから、父に頼まれ外へ新聞を取りに行く。

これも、いつも通り。

けれど、郵便受けを開けると、あるものがいつも通りではなかった。とりあえず、新聞ともう一つの想定外の物を手に取り、家の中へ入った。

「なんだ、それは？」

父に新聞を渡すと、私の手の中にあるもう一つの物を問う。

黒くて薄いソレは手紙のようで、表には『立花 由美様』と記されていた。

「さあ？郵便受けに入ってたの。」

「こんな時間にか？気味悪いな。」

「確かに…。」

「で、内容は？」

「ちょっとまって…。」

私はそう言つと、手紙の封を切つた。

『おめでとつございます。あなたは当選しました。』

中には、そう記された真つ黒なカードだけが入っていた。

「新手の詐欺かなんかだろう。最近、署でもそういう事件を耳にするからな。」

「ふーん。」

「由美も気を付けるよ？」

「うん。」

私はそう返事をする、手紙をゴミ箱に捨てた。

それから、何事もなく平和な日々が続いた。

父の言う通り、あれは詐欺だったらしく、なんの音沙汰もない。

流石、刑事だけの事はあるな。と感心しつつ、夕食の際、父の顔をマジマジと見た。

私の父、立花直幸はもうご存じの通り警察官だ。

本人いわく、優れた知能と運動神経をもっていたため、直ぐに警察官になれたと言っていたが、そこは少々疑わしい。

けれど、今は刑事としてがんばっている父は私の誇りだった。

しかし、実の所、父と私は血が繋がっていない。

私が十歳の頃、孤児院にいた私を、当時二十五歳だった父が引き取って、この六年間立派に育ててくれた。

だから、私も何不自由する事なく過ごせていたし、血の繋がりは無くとも、本当の親子のように思えた。

「ん？どうした？」

ご飯を口に使っていた父が、私の視線に気付いて言った。

「べつにいい。」

と私は笑いながら、食事を続けた。すると、父は、

「なんだよ、気になるな。」

と笑いながら言った。

今日も、いつもと変わらない平和な1日だ。

しかし、この時の私は、これから起きる恐ろしい出来事をするよし
もなかった。

stage:2 黒い手紙

「おい、由美!!」

手紙の事を忘れかけていた頃。

偶然早起きして、新聞を取りな行った父が玄関で叫んだ。

朝食を作っていた私は、火を止めて何事かと玄関へ向かう。

「どうしたの？」

玄関に行くと、父が何かを読みながら険しい顔をしていた。

私の声が耳に入っていないらしく、ジッと手の中の物を見ている。

「お父さん？」

「……………」

もう一度、父を呼んでみた。しかし、反応はない。

「お父さん!!」

「……………」

三度目。反応なし。

「……………」

「……。」

「……お父さんっ！！」

「わっ……ああ、なんだ由美か。」

四度目。とうとう痺れを切らした私は、耳元で叫んでやった。すると、父は驚いたように目を見開く。

「なんだじゃないわよ。お父さんが呼んだんでしょ？」

「あ……ああ、そうだったな。」

「で？なに？」

「……あ、いや……。」

私が尋ねると、父は困ったように眉をひそめて口ごもらせた。

「……どうしたの？」

もう一度尋ねると、

「……別に、呼んでみただけ。」

と、気恥ずかしそうに父は言った。しかし、私は気付いていた。父が、何かをパジャマのポケットにしまった事を。

「……そう。」

けれど、私はその事に触れずに台所へ戻った。

なんだか、触れてはいけない気がしたからだ。それから、朝食を食べ、いつものように学校の支度をする。

白いカッターシャツと紺色のブレザー。ブレザーと同じ色の短いスカート。

そして、最後に靴下を履き、学校規定のネクタイをした。（髪や顔などは朝食を終えた後していた。）

すべての準備を終え、鞆バタバタと階段を降りると、直ぐに玄関を降りる。

携帯の時計を見れば、もう8時。

学校が始まるまで、残り50分だ。

私は急いで靴を履いた。

「鍵閉めたか？」

外に出ると、丁度一緒に出た父が尋ねてきた。

「うん、バッチリ。」

私はそう応え、家を後にする。

それから、そんな私の隣を、父が運転する車が通り過ぎた。

「由美！ー！おはよう！ー！ー！」

しばらく歩いていると、後ろから声がした。
小学校の時から親友である崎山加奈だ。
いつも明るく、笑顔が特徴的な女の子である。

「わっ、加奈！おはよう。」

「なに？由美、ビビりすぎい。」

「えー、だってー。」

そして、私と加奈はいつものように話ながら学校に向かった。

「なにコレ…。」

学校に着くと、靴を履き替える為に靴箱を開けた。

すると、そこには何を意味するのか黒い封筒の手紙が置かれていた。
もしかと思い表を見てみれば、

『立花 由美様』

やはりそう記されていて、私はすぐにあの時と同じ手紙だと分かった。

「どうしたの？」

なかなか来ない由美を不思議に思ってたか、すでに上履きに履き替え
た加奈が横から覗き込んでいた。

「立花 由美様” って…まさかラブレター？」

そして、ニヤニヤと笑いながら私と手紙を交互に見る。

「ちっちがうよー!!」

「えー、でも確かに黒のラブレターはありえないよね。」

「うん。」

「でも気になるー、あけて見なよ。」

「え？」

「内容気になるでしょ？開けてみなよ。」

どうやら加奈は内容が気になるらしく、手紙を開けるようにつながす。

けれど、私は開けたくないと思った。

やけに、嫌な予感がするのだ。

なにか、悪いことが起きるのではないかと思わずにはいられなかった。

だが、隣では早く開けるとでも言わんばかりの形相で、加奈は手紙を直視している。

なので、私は仕方なく手紙の封を切ることにした。

封を開けると、中には

『今夜、お迎えに伺います。』

と記された紙が入っていた。

どういふ事？

迎えに来るって…どこに!？

私の頭の中で色々な疑問が飛び交う。

「いつ悪戯じゃない？」

そんな時、隣で覗き見ていた加奈が言った。

私はそうだといいなと思ったが、それはそれで辛いとも思った。

「そ…そうだよね。」

「う、うん。じゃあ…そろそろ行くよ？」

「うん。」

そして、それを鞆にしまい、上履きに履き替え教室に向かった。

Stage 3 : 不安と異変

その夜、夕食を食べながら私は不安でたまらなかった。

加奈はああ言っていたものの、実際に悪戯かどうかも定かではない。それに、前にも同じような手紙も来たことがある。

だから、これはただの悪戯ではなく、なにか良からぬ出来事の前触れなのではないだろうか。

私は、ボーとしながら考えていた。

「どうした？学校でなにかあったのか？」

その様子を見かねたのか、心配そうに父が声をかけてきた。

「え？あ…ちよつとね…。」

「なんだ、恋の悩みか？」

「ちつ違うよ！！」

「じゃあなんだよ、言ってみる。」

「うん……。」

私は、父に今日の朝、学校の靴箱で起きた事をはなした。父に話せば何かが変わる、そんな気がしたのだ。

「……………」

「お父さん？」

しかし、話を聞いた父はなぜか険しくなった。

何かを考えるように黙って一点を見つめていて、どこかしら何かに脅えているようにも見える。

「……………」

「……………」

「……………由美。」

そして、暫く黙っていたかと思うと、急に立ち上がり、向かいに座る私を後ろから抱き締めてきた。

カラン……………」

持っていた箸が音を立てて床に落ちる。

「お父……………さん？」

「由美……………」

抱き締めた父の大きな手は、珍しく震えていた。

「迎えにくるって……………いったいどういう事……………なのかなあ……………」

食事を終え、風呂に入っ後は寝るだけの私は、ベットの中で手紙

の事を考えていた。

『今夜、お迎えに伺います。』

それだけが記された手紙。

それに、父の異変。

手紙と父は何か関係があるのだろうか。

「はあ……。」

私は、溜め息を吐くと、目を閉じて眠る事にした。

同時刻。部屋でビールを飲みながら、直幸は悩んでいた。

「なんで…由美に…。」

酷く落ち込んだように肩を落とし、彼は疲れたように溜め息を吐いた。

由美を孤児院から引き取ってから6年間。

彼は、実の娘以上に、由美に愛情を注いできた。

”自分の命に変えても娘を守る。”
そう考えていた。

”ずっと一緒にいたい”

そうも考えていた。

けれども、それは”例の手紙”のせいで叶わなくなる。

この幸せも今日までだ。

そう思うと、彼は自然と涙を流していた。

Stage 4 : 誘拐と灰色の瞳

ガタガタガタ…

「っ　　!?!」

深夜0時。

突然ドアが音を立て始めた。

その音で目を覚ました由美は、恐怖で声が出せずにいた。

ガチャ…

ドアが開く。

ゆっくりと音を立てずに半分まで開くと、そこからスルリと黒い塊が入って来た。

キシ…キシ…

そして、ゆっくりと床が軋む音と共にそれは近付いてくる。

” 殺される!! 助けて…お父さん!! ”

心ではそう叫んでいるのだが、恐怖が上回り、声が出ない。

「立花…由美様ですね?」

私지가ガタガタと震えていると、目の前まで来た黒い影が私の顔を覗き込みながら言った。

遠くからは暗くて見えなかったが、近くで見るとただの人のようだ。声色からして男だろう。私は、震えながらも大きく縦に首を振った。

「そうですか。では、行きましょう。」

「んー!？」

すると、男はそう言って私の口に布のような物を押し当てた。そして、私は意識を手放した。

「…あれ？」

目を覚ますと、私はベットのの上に寝かされていた。

辺りを見渡しても自分の部屋ではなく、どうやら先程の男に”誘拐”されたらしい。

「やっと目え覚ましたんかよ、あんた。」

ベットから起き上がると、隣から男の声がした。

どうやら1人ではないらしい。内心、ホッとしていた。そして、声の方へ目を向ける。

「……あ……。」

私は、一瞬時間が止まったのかと思った。

綺麗な金の髪の毛に、今にも吸い込まれてしまいそうな灰色の瞳。

それから、日本人離れした端正な顔立ちに、鍛え上げられた体。

発せられたのは日本語なのに、あまりにも日本人とはかけ離れているので、外国からの留学生か何かかと思った。

だが、今はそんな事よりも……

「あの……ここはどこですか？それにこの首輪……。」

そっちの方が気になって堪らない。

と言うわけで、その男の人に尋ねてみた。しかし、

「知るかよ。こっちが聞きたいくらいだ。」

「で、ですよね。」

怒り気味に返答された上に、

「ところでお前……誰？」

と、質問されたので、

「た……立花由美です。」

と、答えれば、

「ふーん。」

興味なさそうに、返事を返された。一気に空気が重くなる。私は、物凄く帰りたい気持ちに駆り立てられたが、

「あつ…あなたは？」

と聞き返した。

「早川ケイト。俺は日本人とイギリス人のハーフなんだ。」

「へえ…。」

それである容姿か。

と私は納得したように頷いた。

Stage:5 死の始まり

『おはよう諸君。よく眠れたかな?』

ガガガという妙な音と共に、頭上から男の声が聞こえてきた。

「きゃあ!?!」

「っ!?!」

由美とケイトは驚いて上を向くと、そこには一台のスピーカーが備え付けられていた。

『さっそくだが、今からゲームを行わせてもらおう。』

「はあ?ゲーム?」

『ルールは簡単。武器を持って殺し合えばいいんだ。』

「...殺し合う!?!」

由美はとんでもないとばかりに、大きく目を見開いてケイトの方を見た。

一方のケイトも、バカバカしいと溜め息を吐いていた。

『詳しい内容は、各自部屋にルール説明の紙を置いてある。必ず読

んでおくように。でないと、死ぬよ?」

スピーカーの中の男は、クツクツの喉を鳴らして笑った。

『じゃあ、健闘を祈る。』

そう男が言うと、スピーカーは音を発しなくなった。

「…殺し合いつて、凄く良くできた冗談だね。」

部屋の中を見渡しながら、由美はボソリと呟いた。

よく見てみれば、所狭しと置かれている銃や刃物やら簡単に人が殺せそうな道具が並んでいる。

「そつでもないみたいだぜ?」

いつの間にか立ち上がっていたケイトが、テーブルの上にあった紙を持ちながら言った。

「え?どういうこと?」

「まあ、取りあえず来いよ由美。」

「え?あ…うん。」

由美は、ケイトに言われるがままにベットを降り、彼に近寄った。

彼女は正直驚いていた。

勿論、この現状にもだが、どうして、ケイトは会ってそんなに時間は経っていないのに親しくできるのかと。

あやしいとは思ったりしないのかと。

しかし、彼女はルールの紙を見るなり、

ああ、それで…。

と、なにかを理解出来たように頷いた。

デスゲームのルール説明。

今、各自の部屋には男女1人ずつのペアで入ってもらっています。そのペアはチームです。

なので殺しの対象にはなりません。もし相手がかけた場合はそのもう片方の方は失格になりますのでお気をつけください。

また、このゲームはポイント制になります。

1日毎（午前0時）に、こちらが順位を付けて放送を入れますので、最下位の方は失格になります。

なので、最終的には1組のペアしか残らない仕組みになっています。

ポイント説明

1人を殺した場合は5点

ペアを同時に殺した場合は10点

かすり傷、又は何らかの傷を与えた場合は1点

なお、ゲーム中にボーナス点を与える場合があります。

武器や道具について

武器や道具は基本的に自由です。

各自の部屋に備え付けられている武器を使用するなり、相手の武器をうばうなりしてください。

もちろん、拾っても構いません。

ルールは以上です。

万全の準備を行っておいてください。

このゲームは、気の緩みが命取りになります。ではご健闘をいのります。

食糧は所々に用意されています

失格者について

失格だとわかりしだい5分後自動的に首に付けられた首輪が爆破します。

また、外そうとしても無駄です。

諦めてください。

部屋を出るとゲーム開始になります。
なお、一度部屋を出ると自動的に鍵がかかるので部屋に入る事は出来ません。

「俺とお前がペア？」

「そうみたい…。」

「……まっ、なるようになるか。」

ケイトはそう言うと、紙をテーブルの上に置き、ドサリと椅子に座った。

「ど…どういう意味!？」

由美も、ケイトの一言が勘に触ったらしく、怒りながら椅子に座る。

「それより…。」

「え?…なに?」

「これからどうする?」

「…どうするって?」

「不用心に出てみる。確実にアウトだ。間違えなく、殺される。」
真剣な顔つきで言ったケイトの言葉に、由美はゴクリと息を飲んだ。
確かに彼の言うとおりだ。

無計画で外に出れば、確実に死は免れない。
かと言って、このままジツとしていても、待っているのは”死”だけだ。

しかし、それよりも、なぜこのような事に巻き込まれたのだろうか。

「だから、まずは外の様子を確認してから行動する。わかったか？」

「……。」

でも、それはきっと彼も一緒なのだろう。

作戦を考えるケイトの顔を見ながら由美は思った。

「おい！！聞いてんのか!？」

「…え!?!あ…うん、聞いているよ。」

「…たく、何考えてんだよ。」

いつの間にか由美はボーとしていたらしい。

ケイトは困ったように溜め息を吐いた。

こんな事で大丈夫なのか…と。

「何歳かなあ…って思ってた。」

「は？」

「あ…いや…。」

しかし、そんな彼の気持ちも知らず、由美は変な事を口走った。それを隠すように、彼女は慌てて口を塞ぐ。

「18だ。」

「は？」

「歳だよ、歳！お前が聞いたんだろ！？」

「あ。」

「…ったく。」

ケイトは気恥ずかしそうに頬を掻いた。

「ごめん…なさい。」

「別に。で、お前は？」

「じゅ…16歳…。」

「ふーん、年下か。」

「うん。」

由美はケイトの言葉に頷いた。

Stage:6 作戦

それから、俺と由美は、用意されていた食事を食べながら、このゲームでどうやって生き残るか考えた。

そして、1時間考えた末、いくつかの作戦を考えた。

作戦1、

距離をあけて歩かない。出来るだけ一緒に行動する。

作戦2、

力の均等の為、ケイトは前、由美は後ろを守る。

作戦3、

常に武器、食糧、道具などの必需品は、必ず所持しておく。
なお、重たい物はケイトが所持。
動きが鈍る為。

作戦4、

情などは全て捨てる。容易に他のチームを信用しない。

作戦5、

生き残る。

以上。

「でも……。」

「ん？」

「でも、何人の人が参加してるのかな？」

作戦を考え終えた後、なにを思ったのか、由美はポツリと呟いた。

確かに、参加人数を知るのはいくから先、生き延びるためには知っておく必要がある。

「そうだな……。」

かと言って、調べる術もないし。

何か名簿のような物があれば……
後、地図とコンパスも。

俺は真剣に悩んだ。

「あ……。」

「ん？」

「名簿と地図とコンパス…ありましたよ？」

「はあ？」

そんな時、隣から由美が声をかけてきた。
なにかと思つて隣を見てみれば、彼女は俺が必要としていた物を持つて、不思議そうに小首を傾げていた。

マジかよ。

俺は苦笑しながらそれを受け取る。

そして名簿を開け、

マジかよ。

再び苦笑した。

参加人数200人。

チーム数、100。

俺は、このゲームで生き残れるか不安になった。

stage:7 準備(前書き)

生存者:残り200名(100組)

Stage:7 準備

パン

「ぎゃああ　　!?!」

あれから、ケイトは窓から外の様子を伺い、私は必要な物だけを用意されていた大きめのリュックに詰めていた。

その間、幾度となく、外から銃声や悲鳴が聞こえてきて、その度に私は体をビクつかせ、涙が溢れ出しそうになるのをこらえた。

「早川君、入れ終わったよ。」

暫くして、準備を終えた私は、窓の前に立つケイトに言った。

「そっか。じゃあ、俺は武器のチェックするから、交代してくれ。」

「うん。」

「ああ、それと…」

「何?」

「ケイトでいいよ。」

ケイトは、ポッツと私の肩を叩くと武器を選び始めた。

「分かった。」

私も彼の言葉に頷くと窓の前に立った。

パンパン

私が見張りをしている間も、銃声が鳴り止む事はなかった。

ここから見える森や山、そして、その向こうには広大な海は、どれも美しく、そんな場所で殺し合いをするのかと思うと、私は胸が痛くなった。

どうして、こんな事になってしまったのだろう。

どうして、こんな事に巻き込まれてしまったのだろう。

なにも悪い事はしていないのに。

何不自由なく、楽しく過ごしていたのに。

どうして？

私はそう思いながら、それを眺めた。

ピンポンパポーン

「ッ!?」

そんな時、今の今まで静かだったスピーカーが音を発した。

それに反応した私とケイトは、一斉にスピーカーに目を向ける。

『午前10時現在、五組失格。』

スピーカーはそれだけ発すると、また静かになった。

”五組失格”つまりそれは、10名の人死んだ…と云うことになる。

「もう、五組も消えたか。早いな。」

ケイトはそれだけ言うと、再び作業を続けた。

特に気にしている様子もなく、念入りに銃を見ている。

私は、そんな彼をチラリと見た後、私はまた窓の外へ目をやった。

彼にとっては、この出来事はなんの変哲もない”殺し合い”という名の遊びなのかもしれない。

ただ私は、彼のように強くはないから、遊びとも思えないし、そう簡単に人の命を奪う事も出来ない。

こんな私は、弱いのだろうか。

ダメな人間なのだろうか。

いずれにせよ、彼の足でまといも、死ぬのも嫌だ。暫くこの事について苦悩しそうだ。

「はあ…。」

私は小さくため息を吐いた。

「由美、そろそろ行こうか。」

最後にハンドガンを念入りに見ていた彼が、立ち上がった。言った。

「うん。」

私は返事をする、窓から離れ、彼の元に近寄った。

「とじろでせ…。」

「ん?」

「お前それで行くつもり?」

「え?...あ!...!」

彼が苦笑混じりに私を指さすので、何事かと思って自分を見た。

私は忘れていた。

寝てる間に誘拐された事を。

今着ている服は薄いパジャマだけだということ。

このままじゃ、確実に足手まといだ。

「あ……え……どうしよう！！私、パジャマしか持ってないよ！！」

赤面しながら、私は慌てふためく。

しかし、一方のケイトは、

「プツ……心配しなくてもちゃんと用意されてるみたいだぜ。つか、お前気付いてなかったの？マジ、おもしろすぎ。」

クローゼットを指差すと、お腹を抱えて大笑いしていた。

「……もう、早く教えてよ！！」

それに対して腹を立てた私は、荒々しくクローゼットを開けた。クローゼットを開けると、そこには、

『立花 由美様専用』

と書かれた袋と寄り添うように置かれた靴があった。

袋を開けると、自分にピッタリのサイズの上下の服が入っていた。

見た目は、まさに軍隊仕様のものだった。

そして、その隣には

『早川 ケイト様専用』と書かれた袋と大きめの靴が置いてあった。

きっと彼専用のだろう。

「ケイト、あなたのもあるわよ。」

私は、そう言うと備え付けの脱衣場でそのまま入った。

それから、脱衣場のドアの向こうでクローゼットの開く音が聞こえた。

s t a g e : 8 一億の命(前書き)

生存者：残り190人(95組)

「お前は、これ持つてる。」

と、彼から渡された物はハンドガンとその弾。そしてバタフライナイフに手榴弾。

どれも軽い物で、きっと彼は私に気を使ってあえて軽い物を選んでくれたのだろう。

「銃の使い方分かるか？」

「…たぶん大丈夫。」

「そっか、じゃあ安心だな。」

と、彼が持った武器はマシンガンを中心に小さい銃や刃物とした色々な武器。

なかなか重そうである。

けれど、彼はものともせずになんかそれを持っている。その上、

「荷物重くないか？重かったら言えよ。」

「うん。」

私の荷物まで持つと言うのだ。

内心、すごいと感心してしまう。

「じゃあ…覚悟はいいな？」

「だ…大丈夫。」

「なら行くぞ。」

ガチャ……

ケイトは死の舞台への扉をゆっくり開けた。

「由美……。」

同時刻。

立花宅のリビングで、直幸は頭を抱えていた。

突然姿を消した愛しい娘。

由美が寝ていたはずのベッドの上には、

『先日のお送りした手紙通り、立花由美様はお預かりいたします。もし、ゲーム中に立花由美様がお亡くなりになられた場合、我々が貴方様に慰謝料として一億ほどお支払いいたしますのでご安心を。』

と書かれた手紙しかなかった。

「ふざけんな！！金なんていらねえ！！由美を…由美を返せ！！」

直幸は叫びながら、荒々しくテーブルを叩いた。

俺は、由美が全てだった。

こんなこと言えば、子離れ出来ないなど罵られるかもしれないが、俺は由美を愛している。

由美がいてくれるからこそ、俺は今日まで頑張れた。けれど、それがどうだ。

得体の知れない連中に奪われ、生きて戻ってくるかも定かではない状態。

それに、ゲームだあ？

死んだら金払うだあ？

ふざけんな！！

由美をもて遊びやがって…

直幸は、いつもは夜しか飲まないビールを、昼にそれもビンのまま飲み始めた。

口に入りきらないビールが、滴り落ちる。

「畜生!!」

由美…由美…

彼は中毒のようになり、二本目のビールに手をつけた。

stage:9 動く甲冑(前書き)

生存者:残り190名(95組)

ガシヤン

「ひっ。
」

ご忠告通り、部屋を出ると扉に鍵がかかったらしく、完全に中に入れなくなっていた。

由美は音に驚いて少し悲鳴を上げていたが、すぐに何事も無かったように俺の後ろについてくる。

そして、使ったことも無い武器を構え、後ろを注意深く見ていた。

廊下の造りは、部屋の造りと打って変わって中世の城のように思えた。

所々にある今にも動き出しそうな甲冑に、得体の知れない奇妙な絵。それに、床には血のようなものがこびり付いている。

正直、気味が悪い。

そう感じながらも、俺と由美はゆっくり歩みを進める。

カシヤ

暫く歩いた頃、何かが動く音がした。

「今…何か聞こえなかったか」

「え？…別になにも。」

由美に聞いても、彼女は聞こえていないらしい。

気のせいか。

そう思ってまた進もうとしたが、

カシャ

また、あの音が聞こえてきた。

しかも、今度は近くで。

「動くな。」

「え？」

「…誰かいる。」

俺は由美にそう伝えたと、辺りを注意深く見渡した。

カタカタカタ…

すると、自分に一番近い甲冑が震えていた。

銃を構えながらゆっくり近付いてみると、甲冑の目のあたりからギラリと光る目が見えた。

「いたぞー！！銃を構える！！」

俺はそう言っつて、甲冑を蹴飛ばした。

ガシャンッ ガラガラガラ

と甲冑が音を立てて倒れ、衝撃で甲冑の兜が外れる。

「ひいつ
」

中にいた者…いや、男が声を上げた。

「残念だったな、ゲームオーバー。」

そう言っつて俺は男の頭に銃を突きつける。

「まっ…待っつてくれ！！」

「あ？」

「てっ手を組まないか？あんた達とだっつたら生き残れそうなきがする！！」

「なんだと？」

「俺…いい考えがあるんだ。」

とニヤリと笑うと、男はチラッとどこかを見た。

「ケイト！！危ない！！」

パン

由美の叫び声と銃声が重なった。

s t a g e : 1 0 殺人への恐怖(前書き)

生存者：残り190人(95組)

Stage : 10 殺人への恐怖

「いたぞー！！銃を構えろ！！」

いきなり、ケイトはそう叫びながら甲冑を蹴飛ばした。私は何事かと思い振り向く。

「残念だったな、ゲームオーバー。」

するとそこには、兜の取れた甲冑から顔を出した同年代くらいの横たわる男の人と、その人の頭に銃を突き付けるケイト。

ああ…あの人…殺されるんだ。こんなくならないゲームのために命を落とすなんて…。

私は彼等から目を逸らした。これ以上見たくない、そう思ったからだ。そして、遠くを見つめる。

ああ…そういえばお父さんどうしてるかな…。

ちゃんと朝ご飯を食べたかな？

ちゃんと朝ご飯の用意出来たかな？

ご飯は自分で炊けたかな？

不器用な父だから出来てるだろうか不安だ。

それに、私がいなくなつて大騒ぎしているのではないだろうか。

こんな時に不謹慎かもしれないが、それでも心配で堪らない。

でも、それよりも…早く帰りたい。

帰りたいよ…。

「あれ？」

そう思いながら、私は何気なくケイト達から少し離れた甲冑を見た。すると、キラリと何かが光っている。

よく目を凝らしてみると、

あれつてまさか…

女の人が、震えながら銃を構えているのが見えた。

彼女の狙いはきつとケイトだ。

銃口がハッキリと彼を捉えていえている。

しかも、肝心のケイトは気付いていない。

このままじゃ殺される。

ケイトが…殺される…。

殺…され…る。

ケイト!!

「ケイト!! 危ない!!」

「え？」

パアン

私の叫び声と、銃声が辺りに響いた。

気づけば私は、銃を女の人に向けて 引き金を引いていて。

「あ……う……あ……あ……」。

女の方は、唸りながらゆっくりとその場に崩れ落ちた。

「ハアハアハア……」。

妙に鼓動が速くなる。息が荒くなる。

妙に体が震える。

妙に……いや、死ぬほど怖い。

撃った自分が……怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い。

「……………怖いよ……。」

私の目から一粒の涙が零れた。

s t a g e : 1 1 恐れる者と怒る者 (前書き)

生存者：残り190人(95組)

「え？」

由美の叫び声に振り向くと、由美はどこかに銃を向けて撃っていた。キョロキョロと当たりを見渡せば、少し離れた所で女が倒れていた。

まさか！！

俺は直ぐに気づいた。

由美が俺を助けてくれたということ。

「くそッ！！なめやがって！！」

怒りが込み上げてくる。

自分を殺そうとした奴にもだが、簡単に殺されそうになる自分自身に酷く苛ついた。

持っていたマシンガンに力が入る。

「まっ待て！！」

すると、それに気づいた男は止めるよう叫んだが、

「ぶっ殺してやる！！」

俺はそれを聞くことなくそいつを撃った。

ダダダダダ

「ぎゃあああ ! ! ! ! ! !」

廊下に、男の悲鳴がよく響く。

弾丸でグチャグチャと肉の抉れる音も。

血の飛沫が飛ぶ音も。

銃声も。

何もかもがよく響く。

でも一番よく自分の中で響いたのは、

「……………怖いよ……………」

由美の小さな声だった。

「お前…生きてんのか？」

「あうああ……。」

「爆発されると困るし……死んどけ。」

パン

正気に戻った後、俺はもう一人の女に近寄った。男は死んだ。

けれどコイツは生きていて。

虫の息だったが、俺はトドメをさした。

そいつが生きてると困ると思っただからだ。

今…たとえ5分後だとしても爆発されると困る。

間違えなく俺達も巻き込まれる。

そんなのはごめんだ。

だから、困る。

しかし、どうしたものか。

無駄に時間と労力は使ってしまった。

敵は、

『午前11時現在、四組失格。』

今を含めて4チーム消えたようだ。それに、

「恐いよ…恐いよ…。」

由美の精神状態も危うい。

さて、どうする…と言っても何も考えが浮かばねーし。

あーあ、こんな事なら勉強しとくんだった。

いや、関係ねーか。

まあ、とりあえず由美をなんとかしねえと。

そう思つて由美に近付くと、彼女は酷く震えていた。

「…怖いよ…怖いよ…。」

目も虚ろで、先程から同じ事を何回も言っている。

無理もない。

初めて人を殺したんだ。

恐くて恐くて仕方ないのだろう

しかし、そんな悠長なことを言っている暇はない。

いつ、どこから敵はやって来るのか分からないのだ。

「由美！！しっかりしろ！！」

俺は銃を床に置くと、由美の肩を揺さぶった。

「ケイト…私…殺した…私…。」

すると、由美の目からポロポロと涙が絶え間なく溢れ出している。

それを見ると、なぜか苛立ちがこみ上げてくる。

泣きたいのはコイツだけじゃない。

辛いのはコイツだけじゃない。
みんな、辛くても泣きたくても堪えているんだ。
なのにコイツは…。
だから、苛々する。

「ああ、そうだ!!お前は人を殺した!!けど、それがどうした!
!だから、何だって言うんだよ!!」

「え?それは…。」

「お前だけが辛いのか!?お前だけが不幸なのか!?違うだろ!!
甘ったれんな!!」

「……。」

「お前は俺を助けた、それでいいじゃねーか。何をそんなに恐がつ
てるんだ?敵も殺り合うつもりでいたんだぞ。だから一々…気にす
んなよ、いいな?」

「でも……。」

「いいな!!」

「……分かった。」

俺が強く言つと、由美は頷いた。

「よし、じゃあ行くぞ。」

「うん。」

そして、銃を構え警戒しながら歩き出す。

「あっ、そうだ。」

「どうしたの？」

「絶対生きて帰ろつな。」

「うん！！」

「生きて帰ったらさあ…。」

「ん？」

「一緒にカラオケ行かね？」

「うん!!行く!!」

「なんだよ、さっきと違って元気良いなお前。マジ、おもしれー!!」

「もう!!からかわないでよ!!」

辺りに、俺の笑い声と由美の怒声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5313g/>

デスクゲーム

2010年12月1日01時18分発行